

③ 地域の多様なネットワーク～市民の活動はどのように広がっていくのか

1 鴨居第四地区自治会を中心とした活発なネットワーク

【ネットワークの特徴】

① 自治会活動とテーマ型活動との連携

自治会が中心となり、テーマ型の活動団体と連携することで、まちづくりが総合的な展開を見せている事例である。通常、自治会組織がどちらかというと固定的な組立てになっているのに対して、この自治会は、自治会長が兼任する「鴨居駅周辺まちづくり研究会」とネットワークし、タイムリーな人材を確保し、活発な活動が可能になっている。地域の多様な人材が自治会活動に貢献することが可能となる一方で、テーマ型の活動団体が地域に認知されやすくなるという、双方向の効果が見られる。鴨居第四地区自治会ではこのことが威力を発揮している。

② 自治会が中心となることの有効性

自治会は、地域内の人的な資源を活用する可能性が高く、地域内外のまちづくりに、地元企業や教育機関など、あらゆる住民と関わりを持ちやすいポジションにある。連携方法には労力提供、物的な資材や機器の提供、経済的な支援など、多様な方法が考えられ、その幅を広げている。「自治会内に40の多様な団体がある」という会長の言葉は地域に住む人はすべてまちづくりの主人公であり、その要に自治会があるということをも物語っている。

現在の自治会長である狩野氏は、企業を退職後、地域に関心を持ち、区役所の生涯学習の講座に参加したのをきっかけに、地域の活動を始めた。多くの人を知り、地域を知るにつれ、自分の住む地域をより良くするためには仲間が必要だと気づき、鴨居駅周辺ま

ちづくり研究会を7名で立ち上げた。その後誘われて、鴨居第4地区の自治会長となった。いろいろな考え方の人の意見を合わせる難しさはあるが、楽しく活動することをモットーとしている。

【鴨居第4地区自治会の活動】

自治会では5人の副会長を置き、各行事、会議等が企画・運営されているのが特徴である。平成15年には空き巣被害が多発し、全世帯(1410世帯)で「あいさつ運動」を展開。また、ワンワンパトロール、役員によるパトロール活動の効果もあつて、激減した。多くの行事を通じて楽しい自治会をPR。多様な団体と連携して地域全体で活動しているという機運を作り出した。

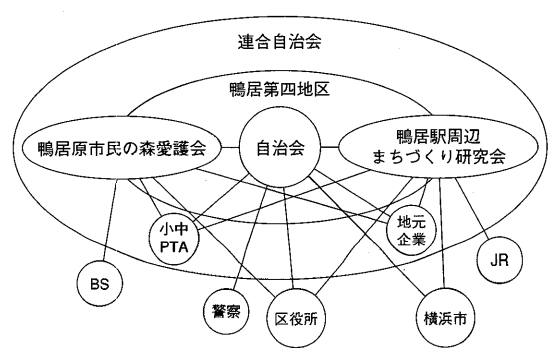
【鴨居駅周辺まちづくり研究会】

「できるときに、できることを、できるだけ」が合言葉。地域のいろいろな団体の得意分野、専門性を活動に活かしている。部会制をとり、「環境」「文化イベント」「ウォーキング」「都市整備」「教育福祉」の5つの部会とHP委員会で構成されている。地域の課題に沿って独自のテーマを設定していることが特徴である。自治会と連携しながら年間100回以上の活動をしている。

- 実施事業 (例)
- 1 ふれあい講座 (年間5回開催「ガーデニング、お笑い、飾り物づくり、ワイン教室」等)
 - 2 「あいさつ運動」80人の子ども達にポスターを描いてもらい200世帯に掲示
 - 3 ホームページの作成 (アクセス件数2万件)
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~kamoi-4/>

- 実施事業 (例)
- 1 鴨居駅通路、階段の清掃
 - 2 鴨居エキコンの開催
 - 3 公開ウォーキング、公開講座 (歴史、まちづくり、定年塾講座等)
 - 4 歴史場所等に標識設置 (緑色のチャレンジ協働事業)
 - 5 小学校でオモチャづくりなど
 - 6 ホームページ
<http://www5f.biglobe.ne.jp/~machiken/>

- 実施事業 (例)
- 1 ホームページ
<http://www.kamoihara.org/>
 - 2 年一回地元住民と愛護会員によるクリーンアップ作戦
 - 3 手作りの森づくり
 - 4 市民が森に親しむイベントの開催



【鴨居原市民の森愛護会活動】
「粗大ゴミが散乱する森」を再生し緑地の保全活動をしている。自治会と連携し森に親しめる行事を開催している。(横浜市で26番目の市民の森)

2 マンション開発をきっかけとしたネットワークの形成 山手まちづくり推進会議

【ネットワークの特徴】

① 地域の問題で結束

学校跡地のマンション建設問題がきっかけとなり、以前からまちづくりで連携していた2つの自治会が協力し、区内の学校など（マンションを除けば参加している自治会は2つだけです。）も含めて「山手まちづくり推進会議」を立ち上げ、「山手まちづくり協定運営委員会」を設置し、「協定」に盛り込まれたまちづくりを進めている。

の結束につながった。

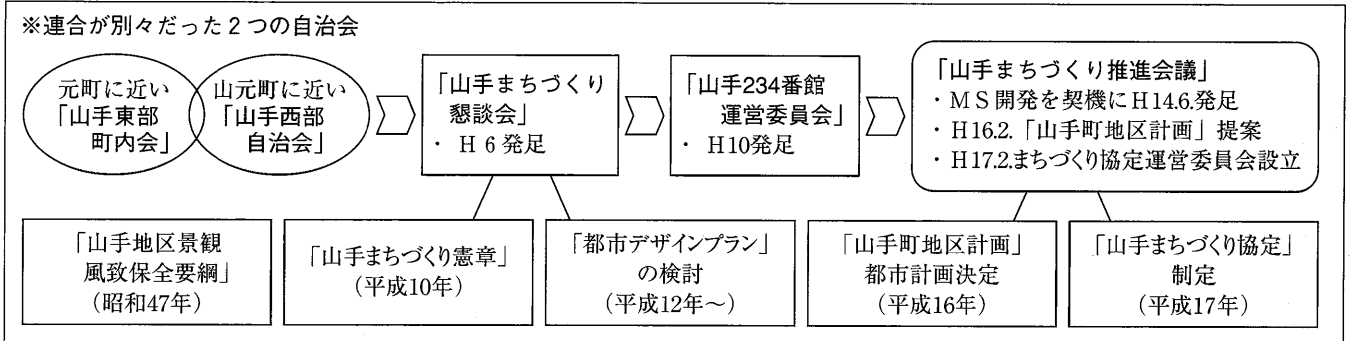
【きっかけ】

平成13年夏、学校跡地にマンション開発計画が持ち上がった。それまでまちづくりと共に考えてきた学校の廃校に伴いその跡地が民間開発業者に売却された。これに呼応するように翌14年6月には地域住民主体による「山手まちづくり推進会議」が発足し、まちのルールを作るために動き出した。

【山手のまちづくりの歴史】

② 日頃のネットワークが背景に
住民のまちづくりの活動や、専門家、行政との日常的に積み上げたネットワークがあったからこそできたといえる。たとえば、住民による西洋館運営組織の繋がりや地域の魅力をアピールし続けてきた市民団体活動、さらに、行政とのパートナーシップに基づき、まちの景観や環境を保全するための営みが連綿と続けられ、地域にゆかりの都市計画の専門家が精力的に関わるなど体系的な取り組みが進められてきたことなど、多様なネットワークの重なりが、緊急時

これまで山手の景観は、風致地区や用途地域の指定、山手地区景観風致保全要綱や歴史を生かしたまちづくり要綱など、いくつもの制度に守られてきた。平成10年に山手地区のまちづくりの理念を示した、「山手まちづくり憲章」が制定された。平成12年には、より具体的なまちづくりの目標や方針を示すプランづくりに着手していた。マンション開発計画が起った後の平成15年から、今後このような大型のマンション建設を防ぐためのルールづくりを進め、平成16年末に地元発意による建築物の規模や用途に応じた高



さが細かく規定された「地区計画」が決定された。さらに、平成17年から、細かなまちづくりのルールを示す自主的なルール「山手まちづくり協定」が制定された。協定では、建築計画届の提出を義務づけ、

地域住民により構成される運営委員会で毎月審査している。平成17年6月から9月までの3カ月間に20件の届出があり、早速効力を発揮しつつある。

「山手町地区地区計画」の概要（抜粋）

【区域の整備・開発及び保全の方針】

位置：中区山手町の「第1種中高層住居専用地域」

面積：約16.0ha

目標(要旨)：開港以来の横浜らしい歴史と文化を色濃く残した住宅・文教地区の環境を維持し、街並みや眺望、歴史資産を継承する。

【地区整備計画（A地区）】

建築物などに関する事項（抜粋）

・建築物の高さ：10mかつ北側斜線（真北方向の隣地との距離×0.6）+ 7 m

上記の基準を適用しない建築物

ア 学校、図書館その他これらに類するもの

イ 神社、寺院、教会その他これらに類するもの

ウ 児童福祉法にもとづく児童施設

※いずれも建築物の敷地面積が1000㎡以上の建築物であること。

3 市内の流域の活動を繋ぐ 川のフォーラム実行委員会

【ネットワークの特徴】

① 市内で活動する数十の団体が定期的に交流

「川（水辺）」をフィールドに持つ環境活動団体のネットワークは、「全国町並みゼミ」「水郷水都」「全国漁民の森フォーラム」のように全国レベルの交流組織はある。しかし、単独自治体において市域レベルで数十に上る活動団体が集まって定期的に交流を持つという事例は全国でも珍しいネットワークと言えよう。本市のように、小さな谷戸と丘の地形が連続し、ひとつの市内に源流から河口までいくつもの河川を抱え、多様な水辺環境があることが要因のひとつと思われる。

② 流域単位のネットワークを模索

本来、川は流域全体と密接な関わりを備えているにもかかわらず、日常生活の中で水辺環境の向上を意識している市民は決して多いとは言えない。テーマ型の活動は、どちらかというとフィールドや関わる市民が限定される傾向にある。本フォーラムでは、多

くの活動団体が交流することで、活動の視点を広げたり、より多様な市民と連携するノウハウを共有しながら、流域単位のネットワーク作りを模索してきた。

【実行委員会設立とこれまでの経緯】

1997年の河川法の改正では、河川の持つ多様な自然環境や水辺空間に対する国民の要請の高まりに因應するため、河川管理の目的として、「治水」「利水」に加え、「河川環境」（水質、景観、生態系等）の整備と保全を位置づけ、地域の意向を反映した河川整備計画を導入することとなった。

これをきっかけとして市民と行政の協働による川づくりを進めるために、主に市内の水辺で活動する市民団体と行政が一堂に会し交流を深める場としてフォーラムは立ち上がった。参加団体数は、第1回（平成9年度）の25団体から第8回（平成17年度）の37団体へと増加し、来年で10周年を迎える。

【活動内容】

毎年、フォーラムに先立つ7、8月の2ヶ月間、各活動

団体は自分たちのフィールドにおいてその年のテーマを冠した水辺の活動を実施する。これを「活動編」と呼ぶ。自然環境を保全・再生するための

の河川清掃や水辺の草刈り、魚や水鳥等の生きもの調査や観察、いかだ遊び、河川流域の自然観察や歴史めぐり等がある。秋に開催されるフォーラムは「総集編」と位置づけられ、2ヶ月間に実施した活動をパネルにまとめて紹介したり、フォーラムを掘り下げるパネルディスカッションを持つなど、情報交換とPR、学習の場として活用されている。2000年からは開催場所、運営主体を流域単位の持ち回りで開催し、流域の連携をさらに深めるきっかけとしてきた。「活動編」の時期に合わせて、同じ流域で活動する団体同士が協力して開催するイベントも行われる。さらに、2002年からは次世代へつなぐことを目指し、近隣の小学校との連携を深める活動も続けてきた。

【流域単位の活動へ】

水や緑の身近な自然環境は水でつながっている流域単位で考えることが望ましい。しかし、現在のまちづくりは自然環境を基盤とする考え方は

まだまだ浸透しているとは言にくい。水辺の市民活動も、流域全体を視野に入れ、同じ流域の活動は連携することが望ましく、フォーラムの開催をきっかけとしてフィールドを越えて連携する事例が増えてきた。その中でも鶴見川流域では、日常的、継続的な連

携が充実している。その理由は、「流域水マスタープラン」づくりを一緒に進めていること、流域全体に目を配って市民活動を支援している中間組織（流域法人バクハウス）の存在が大きく、防災を含めた川から始まるまちづくりが進められている。

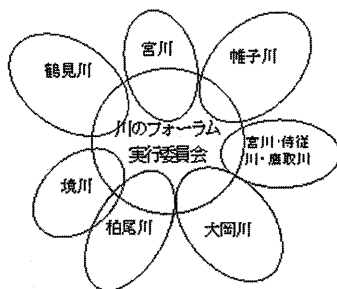
■2003年度のイベント開催地



■これまでの開催テーマ

- ・「私の宝物探し 横浜じゅうが川日和」(1998)
- ・「めぐる水・人・よこはま」(1999)
- ・「めぐる水・人・よこはま よこはま川の博覧会」(2000)
- ・「2001年流域の旅」(2001)
- ・「子どもとともに」(2002)
- ・「水辺が育む子どもと自然」(2003)
- ・「子どもとともに/源流!河口・いつもの水辺」(2004)
- ・「川・まち・歴史」(2005)

■7つの流域



■川のフォーラム開催の背景と経緯

- ・河川法の改正
「治水」「利水」+「環境」「市民参加」
- ・横浜市の河川行政
「ふるさとの川づくり」「水辺の楽校」「水辺愛護会」
- ・市民活動団体の参加
1997年度：25団体⇒2005年度：38団体参加
- ・開催方法
1999、2000年度は市の中心地で開催
⇒2001年度より7流域で持ち回り開催
イベント開催期間を2ヶ月に延長（2000年度より）

4 まとめ

ここでは、ネットワークが地域活動にどのように貢献しているのかを整理する。地域活動におけるネットワークの意義は広がり多様性、その充実により期待される効果は、まちの環境全体が向上したり安全性が高まるなどの空間的な側面と、多様な人材が関わることでまちづくりの機運が盛り上がるなどのコミュニティ活性化の側面がある。

事例より、ネットワークのはたしている役割を抽出する。

【ネットワークの種類】

三つの事例は次のように大別できる。

- ①地域の日常的な自治会活動の延長で広がるネットワーク
- ②問題が起こったことにより地域が結びつくネットワーク
- ③テーマで結びついたネットワーク

3つの事例をその特徴に応じて分類すると表のようになる。また、「対象とする空間」と「テーマの持ち方」を軸として図のように整理が可能である。事例1と事例3は、共に日常的なテーマの活動であるが、事例1は自治会をまともりとした活動と自治会区域を超えた特定テーマの活動が

ミックスしている総合性の高いネットワークであり、事例3は特定テーマで結びついた自治会区域を基盤としないネットワークである。事例2は、自治会を単位として特定の問題に対して組まれたネットワークである。

この図を通じて3つの事例の相関関係を読み取ってみる。緊急時や問題解決のためのネットワークをスムーズに構築するためには日頃のふれあいが必要であるというのが事例1と事例2の関係である。特定テーマの活動が面的な浸透を図るためには地域（すなわち自治会）との結びつきを、反対に豊かな自治会活動を進めるには特定テーマの活動団体との結びつがということを示しているのが事例1と事例3の関係である。

これらのことから、ネットワークの充実というのは、それぞれの輪が4つの象限を超える方向で拡大していくことと言えよう。

ちなみに、広域な問題解決型というのは、地震や洪水など広域的な災害対応であろうか。

【ネットワークづくりのヒント】

- ①活動の複合化でスタッフも

参加者も間口が広がるウォーキングイベントのガイドは郷土歴史家が努めてみる。ただ黙々と歩くだけでなく、まちの歴史を知りながら歩くことができる。スタッフも参加者も様々な関心を持つ人が加わり出合いがある。普段は自分たちの活動で手一杯というのが大方の団体の実情であろう。しかし、複合的な活動はそれぞれが自分たちの活動の延長線上で実施できるしテーマを超えたネットワークの契機となる好事例と言える。

②タテ関係からヨコ関係へ
地域住民はそれぞれ多様な思いをもって暮らしている。環境や安全など、より多くの住民が関わることで大きな効果が期待できることも多い。協力して一緒に物事を進めるためには議論を通じて価値観をすりあわせたり磨き上げる作業が求められる。目線の高さは一緒であり、役割は役割分担のひとつと考えられる。そのような水平的な人間関係は、多様な人材を巻き込み、活動の輪が広がる可能性に満ちたものとなる。

③地域は人材の宝庫

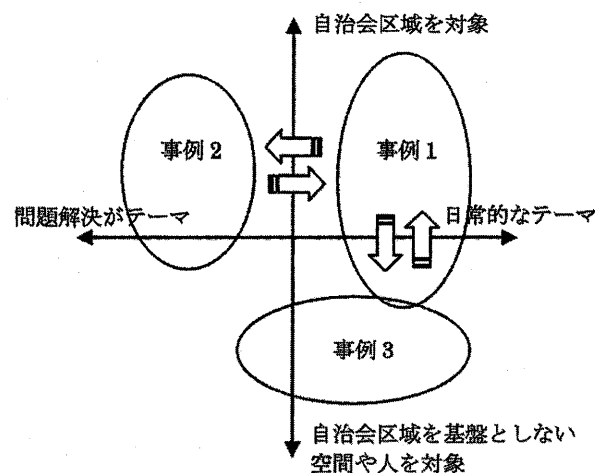
地域住民は専門職の人材に

あふれている。たいていの地域には、あらゆる職種の人が暮らしている。その多彩な特技をまちづくりに生かし、様々な視点からの斬新なアイデアが期待できる。何かしたい、幅を広げたいと思ったら、地域には揃っている。

【終わりに】

2007年問題は、一方で活発な人材が地域に戻ってくることを意味する。地域への好奇心を高め、まちづくりに関わる意欲を醸成するきっかけをつくり、その人たちが参加することにより魅力ある地域がつけられることを期待したい。

課題の関連図



事例の比較

比較項目	事例① 自治会地縁型	事例② 問題解決型	事例③ テーマ型
テーマ	広範なテーマ	特定テーマ	特定テーマ
対象とするフィールド	自治会区域	影響範囲の住民	広汎(個別の活動は特定)
活動期間(日常性)	日常的	緊急的	イベント的(個別は日常的)
関わる人	誰でも可能 多様性	影響を受ける住民	問題意識を持つ市民